

めかるしー 組踊「銘苺子」



羽衣伝説とは

日本各地に言い伝えのある伝説で、天女が羽衣を使い地上に降りて、その天女を目撃した男が引き起こす出来事が物語になっています。大まかな内容はどこも同じですが、天女がそのまま住み着く、男が結婚を求めずに舞を踊ってもらい羽衣を返すなど、地方によって物語にばらつきがあります。

沖縄にも南風原の『御宿井』や与那原の『親川』などに羽衣伝説が伝わっており、宜野湾市にも察度王の生い立ちとして、真志喜の『森の川』に羽衣伝説が伝わっています。

組踊の今

沖縄の伝統芸能「組踊」300年の時を経て現在にまで受け継がれていますが、長い時間の間に周囲の環境は大きく変わってしまいました。言葉や娯楽、習慣も変化しつつある現代において、組踊はどう変化したのか探ってみました。

翻訳の登場

組踊はすべて方言で物語が進みますが、方言がわからない人に向けて、ステージ横で日本語に訳した台詞、歌詞を表示しています。これにより、誰でも組踊を楽しめるようになりました。

現代版組踊の登場

その名のとおり、現代風にアレンジされた組踊をいいます。伝統的な組踊を基本としていますが、使われている楽器は三線ではなく、ギターのような新しい楽器であったり、踊りも躍動感あふれるダンスであったり、まるでミュージカルのような組踊になっています。

また、民話や伝説以外にも、絵本や童話を題材にすることもあり、とても親しみやすい作品が多くあります。

最後に

このように、ただ伝統が引き継がれるのではなく、時代にあわせて誰でも楽しく鑑賞できるように、工夫が施されていった組踊。現在は、浦添市にある国立劇場おきなわや、各市町村の公民館等でも開催されていますので、皆さんも一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。

ごんごんごんごん



↑森の川の周囲の様子 ↓森の川の中の様子



↑写真右のように、日本語訳を映し出したものをステージの両隣に置いています。



組踊「銘苺子」あらすじ

ある日、農夫である銘刈子が、畑仕事に行つた際に、近くの泉から漂う不思議な匂いと光に気が付き、正体を確かめようと泉のほとりで見てみると、天女が下りてきて髪を洗い始めたのです。銘刈子は、天女が髪を洗っている隙に、羽衣を盗み、自分の妻になるよう迫ります。羽衣を盗られ、天に帰れない天女は、この世界でどう生きていっても分らないので、仕方なく銘刈子の妻になることを決めます。

それから月日が経ち、二人の間には9歳になる女の子と、5歳になる男の子が生まれていました。

ある日、姉が弟を寝かしつける子守歌の中で、天女は盗まれた羽衣のありかを知ります。羽衣を取り返した天女は、子供を残して天界に帰ることをためらいますが、やがて決心をして天に昇っていきました。母親が天に昇るさまを見た子供たちは、捨てられたと思ひ泣き出してしまいます。

その後、子どもと銘刈子が途方に暮れているところに、噂を聞いて気の毒に思った王様が送った使いから、子供を城で育て、銘刈子を役人に取り立てると聞き、銘刈子は喜んで家路につきました。

← そもそも、羽衣伝説ってなに？

インタビュー



宜野湾市文化協会
会長 新城康弘

組踊の魅力は何といっても、演者と演奏者のやり取りにあります。

特に、場面ごとの一体感は素晴らしい、登場人物の感情や雰囲気伝わってくるので、まるで物語に引き込まれたかのような感覚になります。また、同じ台詞でも演者によって違う表現になるので、何度でも楽しめることも魅力の一つです。

一方、現場には年配の方が多く、方言で物語が進むので、若い人が組踊に関わりづらい環境になっているのが現状です。そのため、若手の役者を抜擢して、頑張っている姿を見せ、共感を得ることで、組踊を広めてもらいたいと考えています。

舞踊だけでなく、三線や琴、台詞など様々な文化・技術が一体となって作る組踊は見ごたえ抜群です。ぜひご覧になってください。